

爬虫館事件

海野十三

青空文庫

前夜の調べ物の疲れで、もう少し寝ていたいところを起された
私立探偵局の帆村^{ほむら}荘六^{そうろく}だった。

「お越し下すつたのは、どんな方かね」

「ご婦人です」助手の須永^{すなが}が朗^{ほが}らかさを強^しいて隠すような調子で
答えた。「しかも年齢^{とし}の頃は二十歳^{はたち}ぐらいの方です」

(なにが、しかもだ)と帆村はパジャマの釦^{ボタン}を一つ一つ外^{はず}しながら
ら思った。この手でも確かに目は醒^{さめ}る。……

「十分間お待ちねがうように申上げて呉れ」

「はッ。畏まりました」

須永はチョコレート**の**兵隊のように、わぎと四角ばって、帆村の寢室を出ていった。

隣りの浴室の扉をあけ、クルクルと身体につけたものを一枚残らず脱ぎすてると、冷水を張った浴槽へドブンと飛び込み、しぶきをあげて水中を潜りぬけたり、手足をウンと伸したり、なんのことはない臙膈獣のような真似をすること三分、ブルブルと飛び上って強い髭をすっかり剃り落すのに四分、一分で口と顔を洗い、あとの二分で身体を拭い失礼ならざる程度の洋服を着て、さて応接室の内扉をノックした。

応接室の函はこのなかには、なるほど若い婦人が入っていた。

「お待たせしました。さあどうぞ」と椅子を進めてから、「早さっそ速くご用件を承うけたまわりましょう」

「はア有難とう存じます」婦人は帆村の切り出し方の余りに早いのにちよつと狼ろうばい狽ばいの色を見せたが、思いきつたという風ふうで、黒眼がちの大きい瞳を帆村の方に向け直した。その瞳の底には言ひしれぬ憂うれいの色が沈んでいるようであった。「ではお話を申しあげますが、実は父が、突然行方不明になつてしまつたんでございます——。昨日の夕刊にも出たのでございますが、あたくしの父というのは、動物園の園長をして居ります 河内武太夫かわちたけだゆうでございます」

「ああ、貴女が河内園長のお嬢さんのトシ子さんでいらつしやいますか」帆村は夕刊で、憂いに沈む園長の家族として令嬢トシ子（二〇）の写真を見た記憶があつた。その記事は社会面に三段抜きで「河内園長の奇怪な失踪・動物園内に遺留された帽子と上衣」といったような標題がついていたように思う。

「はア、トシ子でございます」と美しい眼をしばたき、「ご存知でもございましょうが、私共の家は動物園の直ぐ隣りの杜の中にございまして、その失踪しました十月三十日の朝八時半に父はいつものように出て行つたのです。午前中は父の姿を見たという園の方も多いのでございしますが、午後からは見たという方が殆んどありません。お午餐のお弁当を、あたくしが持つて行きました

が、それはとうとう父の口に入らなかつたのでした。正午にも事務所へ帰つてこないことを皆様不思議に思つていらつしやいました。父は大分変り者の方でございまして、気が変わるとよく一人でブラリと園を出まして、ひろこうじ 広小路の方まで行つて寿司屋すしやだのおでん屋などに飛び込み、一時半か二時にもなつてヒョックリきえん帰園いたしますこともございますので、その日も多分いつもの伝でんだらうと、皆さん考えておいでになつたのです。しかし閉園時間の午後五時になつても帰つて参りません。たまにはずっと街へ出掛けて夜分まで帰らないこともあります。その日は事務室に帽子もあり上衣も残つて居ますので、いつもとは少し違うというので、さいこう 西郷さん——この方は副園長をしていらつしやる若い理学士で

す——その西郷さんがお歸りにうちへお寄り下すつて、『園長の例の病気が始まった様ようですよ』と注意をしていつて下さいました。ところが其の夜は、とうとう歸つて参りません。夜遅くなることはありまして、たとい一時になつても二時になつても歸つてくる父です。それが歸つて来ないのですから、どうしたことだろうと母も私共も非常に心配しています。園内も調べていただきましたが判りません。警察の方へも捜そう索方さくかたをお願いいたしました。『別に死ぬ動機も無いようだから今夜あたり歸つて来られますよ』と云つて下さいました。しかし私共は、なんだか其その儘ままでは、じつと待つていられないほど不安なのでございます。万一父が危き害がいを加えられてでもいるようですと、一いっ刻こくも早く見付けて助け出

したのでございます。それで母と相談をして、お力を拝借はいしやくに上あがつたわけなのでございます。どう思召おぼしめしましょうか、父の生死せいしのほどは」

トシ子嬢は語り終ると、ほんのり紅潮こうちようした顔をあげて、帆村の判定を待った。

「さあ——」と帆村は癖で右手で長くもない顎あごの先をつまんだ。

「どうもそれだけでは、河内園長の生死しょうしについて判断はいたしかねますが、お望みとあらば、もう少し貴女あなた様うかがからも伺うかがい、その上で他の方面も調べて見たいと思います」

「お引受け下すつて、どうも有難たすとう存じます」トシ子嬢はホツと溜息ためいきをついた。「何たすなりとお尋ねくださいまし」

「動物園では大いに騒いで探したようですか」

「それはもう丁寧ていねいに探して下すつたそうでございます。今朝、園にゆきまして、副園長の西郷さんにお目に懸かりましたときのお話でも、念のためと云うので行方不明になった三十日の閉門へいもん後、手分けして園内を一通り調べて下すつたそうです。今朝も、また更さらに繰返くりかえして探して下さるそうです」

「なるほど」帆村は頷うなずいた。「西郷さんは驚いていましたか」

「はア、今朝なんかは、非常に心配して居て下さいました」

「西郷さんのお家とご家族は？」

「浅草あさくさの今戸いまどです。まだお独身ひとりで、下宿していらつしやいます。

しかし西郷さんは、立派な方でございますよ。仮かりにも疑うよう

なことを云つて戴いたきますと、あたたくしお恨うらみ申上げますわ」

「いえ、そんなことを唯今考えているわけではありません」

帆村は今時いまどき珍らしい、日本趣味の女性に敬意と当惑とうわくとを捧ささげた。

「それから、園長はときどき夜中の一時や二時にお帰宅かえりのことがあるそうですが、それまでどこで過すごしていらつしやるのですか」

「さアそれは私もよく存ぞんじませんが、母の話によりますと、古いお友達を訪ねて一緒にお酒を呑んで廻まわるのだそうです。それが父の唯一の道楽でもあり楽しみなんです、それというのもそのお友達は、日露戦役にちろせんえきに生き残のこった戦友で、逢えばその当時のことが思い出されて、ちよつとやそつとでは別れられなくなるんだと

いうことです」

「すると園長は日露戦役に 出 征 されたのですね」

「は、沙河の 大 会 戦 で 身 に 数 弾 を う け、それから内地へ 送 還 されましたが、それまでは勇敢に闘いましたそうです」

「では 金 鷄 勲 章 組 ですね」

「ええ、功六級の 曹 長 でございます」 応 え ながら、こんな

ことが父の失踪に何の関係があるのかと、トシ子は探偵の 頭 脳 に 稍 失 望 を 感 じ ない わけ に ゆ か な かつ た。

しかし最後へ来て、この些細らしくみえるのが、事件解決の一つの鍵となろうとは二人もこの時は 夢 想 だ も し な かつ た。

「園長はそんなとき、帽子も上衣も着ないでお自宅にも云わず、

ブラリと出掛けるのですか」

「そんなことは先ずございませぬ。自宅に云わなくとも、帽子や上衣うわぎは暖いときならば兎とに角かく、もう十一月の声を聞き、どつちかと云えば、オーヴァーが欲しい時節です。帽子や洋服は着てゆくだろうと思いますの」

「その上衣はどこにありましようか。鳥渡ちよつと拝見したいのですが……」

「上衣はうちにございますから、どうかいらしって下さい」

「ではこれから直ぐに伺いましょう。みちみち古い戦友のことも、もつと話して戴いたこうと思ひます」

「ああ、半崎はんざき甲平こうへいさんのことですか？」トシ子嬢は、父の戦

友の名前を初めて口にしたのであった。

2

園長邸を訪ねた帆村は心痛しんつうしている夫人を慰なぐさめ、遺留いりゆうの上衣を丹念に調べてから何か手帖に書き止めると、外ほかに園長の写真を一葉借り、園長の指紋を一通り探し出した上で地じつづ続きの動物園の裏門を潜くぐったのだった。

西郷という副園長は、すぐ帆村に会ってくれた。あの西郷隆盛

の銅像ほど肥こえている人ではなかったが、随ずい分ぶんと身体この大きい人だった。

「園長さんが失しつ踪そうされたそうで御心配でしょう」

と帆村は挨拶あいさつをした。「一体いつ頃お気がつかれたのですか」

「全く困ったことになりましたよ」巨きよ漢かんの理学士は顔を曇らせ

て云った。「いつ気がついたということはありませんが、不審を

いただいたのは、あの日の正午過ひるすぎでしょう。園長が一いつこう向こう食事に帰

つてこられませんでしたのでね」

「園長は午前中なにをしていられたのです」

「八時半に出勤せられると、直ぐに園内を一いちじゆん巡めぐせられますが、

先ず一時間懸かかります。それから十一時前ぐらい迄は事務を執とつて、

それから再び園内を廻られますが、そのときは何処ということなしに、朝のうちには気がつかれた檻おりへ行つて、動物の面倒をござらになります。失しつそう踪されたあの日も、このプログラムに別に大した変化は無かつたようです」

「その日は、どの動物の面倒を見られるか、それについてお話はありませんでしたか」

「ありませんでしたね」

「園長を最後に見たという人は、誰でした」

「さあ、それは先刻警察の方が来られて調べてゆかれたので、私も聞いていました。一人は爬虫館はちゆうかんの研究員の鴨田兎三夫かもだともおという理学士医学士、もう一人は小禽暖室しょうきんだんしつの畜養主任ちくようの棕島むくじま

二郎じろうという者、この二人です。ところが兩人が園長を見掛けた

という時刻が、殆んど同じことで、いずれも十一時二十分頃だといふのです。どっちも、園長は入つて来られて二三分、注意を与えて行かれたそうですが、其その儘まま出てゆかれたそうです」

「その爬虫館と小禽暖室との距離は？」

「あとで御案内いたしますが、二十間ほど距へだたつた隣り同士です。

もつとも其の間に挟はさまつてずつと奥に引込んだところに、調餌室ちようじしつ

という建物がありますが、これは動物に与える食物を調理したり

蔵しまつて置いたりするところなんです。鳥渡ちよつと図面を描いてみます

と、こんな工合です」

そういつて西郷理学士は、鉛筆をとりあげると、爬虫館附近の

見取図を描いてみせた。

「この二十間の空地あきちには何もありませんか」

「いえ、桐きりの木が十二本ほど植うわつています」

「その調理室へ園長は顔を出されなかつたんでしうか」

「今朝の調べのときには、園長は入つて来られなかつたと云つて
いました」

「それは誰方どなたが云つたんです」

「畜養員ちくよういんの北外きたとせいきち星吉という主任です」

「園長がいよいよ行方不明ゆくえふめいと判つた前後のことを話していただけ
ませんか」

「よろしゆうございます。閉園へいえん近い時刻になつても園長は帰つ

て来られません。見ると帽子と上衣は其儘そのままで、お自宅から届いたお弁当もそつくり其儘です。黙って帰るわけにも行きませぬので、畜養員と園えんてい丁とを総動員して園内の隅から隅まで探させました。私は園丁の比留間ひるまというのを連れて、猛獣の檻おりを精くわしく調べ廻りましたが異状なしです」

「素しろうつ人考えですがね、例えば河馬かばの居る水槽すいそうの底深く死体が隠れていないかお検しらべになりましたか」

「なる程もつとご尤もです」と西郷副園長は頷うなずいた。「そういう個所は、多少の準備をしなければ検しらべられませんので直ぐには参りませぬでしたが、今日の午後には一つ一つ演やつているのです」

「そりや好都合です」と帆村探偵が叫んだ。「すぐに、私を参加

させていただきたいのですが」

西郷理学士は承諾して、卓上電話機を方々へかけていたが、やつとのことで、そうさくたい搜索隊がこれから爬虫館の方へ移ろうというところだと解ったので、その方へ帆村を案内して呉くれることになった。

白い砂利の上に歩を運んでゆくと、どこからともなく風に落葉が送られ、カサコソと音をたてて転がっていった。もう十一月になつたのだ。もりかげ杜蔭にひともとあざや一本鮮かな紅葉が、水のように静かな空気の中に、なにかしらそその唆かすような熱情を溶とかしこんでいるようだった。帆村は、ちよつと辛い質問を決心した。

「園長のお嬢さんは、まだお独身ひとりなんですかねエ」

「え？」西郷氏は我が耳を疑うもののように聞きかえした。

「お嬢さんはまだ独身です。探偵さんは、いろんなことが気に懸かるらしいですね」

「私も若い人間として気になりますのでね」

「こりや驚いた」西郷理学士は大きな身体をくねらせて可笑おかしがつた。「僕の前でそんなことを云ったつて構かまいませんが、鴨田君の前で云おうものなら、蟒うわばみを嚇おそしかけられますぜ」

「鴨田さんていうと、爬虫館の方ですね」

「そうです」と返事をしたが、西郷氏はすこし冗談を云いすぎたことを後悔した。「ありや学校時代の同級生なので、有名な真面目な男だから、からかっっちゃ駄目ですよ」

帆村は何も応えなかったが、先に園長令嬢のトシ子と語ったときのことと、いま西郷副園長が冗談に紛らせて云つたこととを併せて頭脳あたまの中で整理していた。この上は、鴨田という爬虫館の研究員に会うことが楽しみとなった。

「鴨田さんは、主任では無いのですか」

「主任は病気で永いこと休んでいるのです。鴨田君はもともと研究の方ばかりだったのが、気の毒にもそんなことで主任の仕事も見ていますよ」

「研究といえますと——」

「爬虫類はちゅうるいの大家です。医学士と理学士との肩書をもっています
が、理学の方は近々学位論文を出すことになつていたので、間も

なく博士でしょう」

「変った人ですね」

「いや豪い人えらいですよ。スマトラに三年も居うて蟒わばみと交際つきあいをしていたんです。資産もあるので、あの爬虫館を建てたとき半分は自分の金を出したんです。今も表に出ているニシキヘビは二頭ですが、あの裏手には大きな奴が六七頭も飼つてあるのです」

「ほほう」と帆村は目をまる丸くした。「その非公開の蛇しんも検しらべたんですか」

「そりや勿論ですよ。研究用のものだからお客さんにこそ見せませんが、検べることは一般と同じに検べますよ。別に園長さんを吞せんでいるような贅ぜいたく沢たくなのは居ませんでした」

帆村は副園長の保証の言葉を、そう簡単に受入れることはできなかった。園長を最後に見掛けたというところが、此の爬虫館と小禽暖室の辺であつてみれば、入念に調べてみなければならぬと思つた。

「さあ、ここが爬虫館はちゆうかんです」

副園長の声に、はッと目をあげると、そこにはいかにも暖室だんしつらしい感じのする肉色の丈夫な建物が、魅惑みわくてき的な秘密を包んで二人の前に突立っていた。

扉^{ドア}を押して入ると、ムツと噎^むせかえるような生臭^{なまぐさ}い暖気^{だんき}が、
真^ま正面^{まへ}から帆村^{ほむら}の鼻^{はな}を押^おえた。

小劇場^{せうげきやう}の舞台^{ぶたい}ほどもある広^{ひろ}い檻^{おり}の中には、頑^{がん}丈^{じやう}な金網^{かなあみ}を
距^{へだ}てて、とぐろを捲^まいた二頭^{にとう}のニシキヘビが離^{はな}れ離^{はな}れの隅^{すみ}を陣取^{じんしよ}
つてぬくぬくと睡^{ねむ}っていた。その褐^{かつしよく}色^{いろ}に黒^{くろ}い斑^{はん}紋^{もん}のある胴^{どう}
中^{ちゆう}は、太^{ふと}いところ^{ところ}で深^{ふか}い山^{さん}中^{ちゆう}の松^{しょう}の木^きほどもあり、こまかい
鱗^{うろこ}は、粘^{ねん}液^{えき}で気味^{きみ}のわるい光沢^{こうたく}を放^{はな}っていた。頭^{あたま}は存^{ぞん}外^{がい}に
小柄^{せうがら}で、眼^{まなこ}を探^{たづ}ねるのに骨^{ほね}が折^よれたが、やつとのこと^{こと}で彫^ほりこんだ
よ^ような黄^{わう}色^{しき}い半開^{はんかい}きの眼玉^{がんぎよ}を見^みつけたとき^{とき}には、余^{あま}りい^い気持^{きもち}は

しなかつた。帆村たちの入って来たのが判つたものか、フフツ、フフツと、風に吹きつけられたように身体の一部を波うたせていたのだった。

こんなのが、裏手にはまだ六七頭もいるんだと思うと、生来せいらい蛇嫌いな帆村はもうすっかり憂鬱ゆううつになつてしまつた。

そのとき奥の潜り戸くぐりどをあけて、副園長の西郷が、やや小柄の、うわばみ蟒に一呑みにやられてしまいそうな、青白い若紳士を引張つてきた。

「ご紹介します。こちらがこの爬虫館はちゆうかんの鴨田研究員です」
二人は言葉もなく頭を下げた。

「園長の最後に此の室へ来られたときのことをお伺いうかがしたいので

すが」

「今朝も大分警視庁の人に苛められましたから、もう平気で喋れますよ」と鴨田研究員は前提ぜんていして「私は時計を見ない癖くせなのでしてネ、正午ひるのサイレンからして、あれは多分十一時二十分頃だつたろうと思うのですが、カーキ色の実験衣を着た園長が入つて来られました、そうです、二三分間だと思ひますが、ここに出ている一頭のニシキヘビの元気が無いことから、食餌しょくじの注意などを云つて下すつて其儘そのまま出てゆかれたんです」

「それは此の室だけへ入つて来られたのですか、それとも」

「今の話は奥でしました。私は別にお送りもしませんでした。園長は確かにこの潜り戸くぐりどをぬけて此の室へ入られたようです」

「表へ出られた物音でも聞かれましたか」

「いえ、別に気に止めていなかっただけですから」

「なにか様子に変ったことでもありましたでしょうか」

「ありません」

「園長が表へ出られたと思う時刻から正午ひるまでに、戸外に何か異様な叫び声でもしませんでしたか」

「そうですね。裏の調餌室へトラックが到着して、何だかガタガタと、動物の餌を運びこんでいたようですがね、その位です」

「ほほう」帆村は眼を見張みはった。「それは何時頃です」

「さあ、園長が出てゆかれて十五分かそこらですかね」

「すると十一時三十五分前後ですね。動物の食うものというと、

随分嵩張かさばったものでしょうね」

「それア相当なもんですなア」と副園長よこあいが横合よこあから云った。

「馬鈴薯じゃがいも、甘藷かんしょ、胡蘿蔔にんじん、雪花菜ゆきやさい、蕪ふすま、藁わら、生草なまくさ、それから食パンだとか、牛乳うさぎ、兎と、鶏ばにく、馬肉、魚類など、トラックに満載まんさいされてきますよ」

「なるほど」帆村または又鴨田またの方へ向き直った。「莫迦ばかげたことをお尋ねたずいたしますが、この蟒うわばみは人間を呑みますか」

「呑まないとは保証できませんが、あまり人間は襲おそわない習しゅうせ性せいです。

先刻さつきもそんなことを訊かれましたが、園長を呑んでいないことは確かですよ。人間を呑むには時間もかかれば呑んでも腹ふくが膨ふくれているので直ぐ判ります」

帆村は黙って頷いた。

しかし人間の身体を九つ位にバラバラに切断して、この蟒に一塊ずつ喰べさせれば、比較的容易に片づくわけだし、腹も著しく膨むこともなからうと考えたので、質問してみようと思ったが、これは重大な結果になりそうだから、もつと先で訊くことにした。そしてそれとなく蟒全部の腹の膨れ具合を検べてやろうと思つた。

それで裏手の鴨田理学士の研究室を見せて欲しいと云うと、直ぐ許されて、一同は潜り戸を入つていつた。

其処はいとも奇妙な広い部屋だった。豎長の三十坪ほどもあるという、ぶちぬきの一室だったが、縦に二等分し、一方には

白ペンキを盛んに使つた卓テーブル子や書棚や、書類函や、それから手術台のようなもの、硝子ガラス戸の入つた薬品棚、標本棚、外科器械棚などが如何にも贅ぜいたく沢に並び、其他そのた、人間が入れそうなタンクのような訳のわからぬ装置が二つも三つも置かれてあつた。窓は上の方に小さく、天てんじよう井には水銀灯をつかつた照明灯が、気味の悪い青白光せいはつこうを投げかけていた。床ゆかの一ヶ所を開けて地下に潜ひそんでいる園丁の一団があつたが、それは話のあつた搜索隊に違ひなかつた。室の一隅いちぐうには警視庁の制服警官せいふくが二人ほどキラキラする眼を光らせていた。

他の縦たて半分はんぶんには頑丈な檻があつて、その中に見るも恐ろしい大ニシキヘビが七頭、死んだようになって勝手な場所を占領して

いた。帆村は檻に掴まると、端の鱗から一頭一頭、腹の大きさを
見ていった。しかしどうやらどの蛇も思いあたるような大きな腹
をしたのは居なかった。しかしバラバラの死体を呑んだとして、
犯行が三十日の正午近くと仮定し今日は二日の午後であるから二
日過ぎとすると、この間に鱗の腹は目立たぬ程に小さくなったの
ではあるまいか。

「鴨田さん」帆村は背後を振り返った。「ニシキヘビには山羊を
喰べさせるようですが、何日位で消化しますか」

「そうですね」鴨田は揉み手をしながら「実直 そうな顔を出し
た。「六貫位はある山羊を呑んだとしまして、先ず三日でしよ
うか」

それなれば十二三貫ある園長を八つか九つの切れにして、九頭の鱗に与えるなら、いままでまる二日は過ぎたから、もう程よく溶けたところに違いない。しかし一体誰が殺したか、誰が死体をバラバラにし、誰が鱗に与えたか。それは一向にハッキリ判つていなかったが、この生なましろ白鴨田研究員の関係していることは否いなめなかつた。

「ああ、西郷君」そう云つたのは鴨田理学士だつた。「一昨日この爬虫館の前で拾しゅうとく得したので僕が事務所へ届けて置いた万年筆ね、あれは先刻警官の方が調べられて、園長さんのものだと言つたそうですよ」

「ああ、そう」西郷副園長は簡単に応こたえたが、其の後でチラリと

帆村の方に素早い視線を送った。

帆村は知らぬ風をして、この会話の底に流れる秘密について考えた。館の前で園長の持ち物を拾ったということは、場合によっては決して鴨田氏の利益ではなかった。万年筆はよく落すものではあるが、そんなに具合よく館の入口に落すものではない。また物静かな園長が落すというのも可怪しい。鴨田が後に怪まれることを勘定に入れて落して行ったか、さもなくて鴨田が自ら落ちていたと偽り届けたものか、どっちかである。始めのようだと鴨田を陥れようとしているのは誰かという問題となり、後のようだと鴨田は自ら嫌疑をうけようとするもので、そこには容易ならぬ犯罪性を発見することになって、帆村は鴨田の性格を知るため

に、室内を隅から隅まで見廻して、何か怪あやしい物はないかと探し求めた。

「鴨田さんの鞆ですか、これは」と帆村は棚の上に載っている黒皮の書類鞆を指した。

「そうです、私のです」

「随分大きいですね」

「私達は動物のスケッチを入れるので、こんな特製のものじゃないと間に合わないのです」

「こつちの方に、同じような形をした大きなタンクみたいなものが三つも横になっていますが、これは何ですか」

「それは私の学位論文に使った装置なんです。いまは使っていま

「前は何が入っていたのですか」

「いろいろな目的に使いますが、ヘビが風邪をひいたときには、此の中に入れて蒸気で蒸してやったりします」

「それにしても、何だか液体でも入っていないようなタンクですね」

「ときには湯を入れたりすることもありますが」

「だが鱗の呼吸ぬけもないし、それに厳重な錠がかかっていますね」

「これは兎に角、論文通過まで、内部を見せたくない装置なんです」

「論文の標題は？」

「ニシキヘビの内分泌腺ないぶんびせんについて——というのです」

そこへドヤドヤと、警官と園丁との一団が鴨田研究員を取巻いた。

「もうこの建物は天井から床ゆかした下まで調べましたが、異状がありませんでした。唯残ただっているのは、あの三つのタンクですが、お言葉を信用してそのままにして置きます」

帆村はそれを聞くと飛出してきた。

「待つて下さい。あのタンクは、是非調べて下さい」

「でも開けられないのですよ」帆村の見識みしり越こしの警官が云った。

「そんなことは無い。ね、鴨田さん、開けた方が貴方あなたのためにもいいですよ。あのタンクだけで、清浄せいじょう潔白けつぱくになるのじやあり

ませんか」

「いやそう簡単に明けられません」鴨田は強く反対した。「あれを明けると、爬虫館の室温や湿度が急降して、爬虫に大危害を加えることになるので、ちよつとでも駄目です」

「私は大したことはあるまいと思うのですが、演ってみては？」
帆村は尚も主張した。

「いやそうは行きません。私は園長から相当の責任を持って爬虫類を預っているのですから、拒絶する権利があります。尤も他を求めて、どうにも解決の鍵が見つからぬときは開けもしましょうが、それにはちよつと準備が入ります。この爬虫たちを、元居た暖室の方へ移すのですが、それにはあの室を充分なところま

で温め、湿度を整えてやらねばならんのです」

「弱ったな」帆村は苦い顔をした。「一体何時間あつたら、別室の準備ができるのです」

「まア五時間か六時間でしようね」

「そりや大変だ。じゃ私も暫く考えてみましょう」と帆村は断乎だんことして云つた。「その間に別の部屋を検べて来ましょう。西郷さん、調餌室というのを案内して下さい」

帆村は爬虫館の外へ出ると、チエリーに火を点けて、うまそうに吸った。

彼の観察したところでは、若し鴨田かもだに嫌疑けんぎをかけるならば、鴨田は何かの原因で、河内園長を爬虫館に引摺りひきずこみ、これを殺害して裸体らたいに剥ぐと、手術台の上でバラバラに截断せつだんし、彼が飼育している鱗うわばみに一部分喰わしてしまつたのであろう。真逆まさかバラバラにしたとは気が付かなかつたので、捜索隊も鱗の腹を見るには見だが、人間を頭から呑んでいる程の膨れた腹ふくをした鱗が居なかつたので、それで安心していたものと思う。あの特殊装置というものの中には、きつと血染ちぞめになつた園長の服とか靴とかが隠匿され

ているのではなからうか。万年筆は、園長を館の入口で絞めあげるときに落ちたもので、それを後に何かの事情があつて遺失品として届けたものであろう。

しかし今横に並んで歩いている西郷副園長が、この万年筆について不審な行動を演やつているのにも気がつかないわけではない。

第一に三十日の遺失品として届けられたものなら、直ぐにも疑つて調べなければならぬのが、今まで黙つていたし、一と目みれば園長のものだ位は判りそうなものを何なにゆえ故口を閉めていたのか、嫌な眼付で帆村を覗いたところと云い、ひよつとしたら西郷がすべてを画策かくさくし、嫌疑が鴨田にかかるように、わざと爬虫館の前に落して置いたのではあるまいか。園長殺害の方法も死体も判ら

ぬが、原因は勤務上の怨恨えんこん又は、失恋でもあろう。そう思つて西郷の横顔を見ると、どこやら悪人らしいところも無いでは無かつた。

しかし嫌疑けんぎはくじやく薄弱な西郷まで疑うのは、探偵上の恐しい無限

地獄へ落ちこんだようにも思われた。園長令嬢トシ子の言葉としても、副園長を疑うことは申訳なかつた。でも疑えば、トシ子は鴨田のことを爪の尖さきほども言わず、却かえつて西郷のことを弁明した。

これは西郷の愛に酬むくうことができなかつたので自ら弁解をつとめつぐなて償いをし、一方鴨田との愛の問題はもう解決を見ているので一

言も云わなかつたと考えてはどうか。いよいよ纏もつれ糸のように乱れてくる帆村の足許あしもとに、事件解決の鍵かと思われる物が転がっ

ていた。それは一個の釦ボタンだった。

「おお、これは園長の洋服についていた釦に違いない。どうしてこんなところに在るのだろう」

帆村は兼ねて園長の遺のこしていった上衣の釦ボタンの特徴を手帳に書き留めて置いたことが役立つて大変好運だと思った。それにしても釦を拾った場所というのが、調餌室の直ぐ前の、桐きりの木材との間に挟はさまった路面だったので、これでは調餌室の人達について一応嫌疑をかけてみないわけにはゆかない。いや、ひよつとすると、爬虫館前に落ちていたという園長の万年筆もこの釦と殆んど同時に落ちたものと認定すると、これは園長の身体を搬はこんで行った経路おのずかを自ら語っていることになりはしないであろうか。恐らく万年筆

が最初に落ちて、次にチョツキの釦と思うものが落ちたと考えていいであろう。園長の身体は、爬虫館の前から調餌室へ搬ばれたと考えていいであろう。

だが、どうして人目につかず搬んで行けたかということが次の疑問だった。それが出来たとすると、特殊の状況が必要だったことになる。白昼^{はくちゆうか}下では、その時、幸い^{さいわ}にも観覧人も少く畜養員や園丁も現場^{げんじょう}に居合わせなかつたというとき、又夜間なれば、これは極めて容易^{きわ}に行われる。しかし万年筆は園長失踪の日に発見されたのだから、搬^{はこ}ばれたのは夜間になる以前だといわなければならぬ。しかも十一時二十分頃までは園長を見掛けたという人があるのだから、正午^{ひる}になれば園長は食事のため事務所へ帰っ

て行った筈で、それが無かったとすると、どうしても失踪は十一時二十分から正午の間と断定するのが常識のように思う。コースは調餌室から爬虫館ではなくて、反対に爬虫館から調餌室へと考えられる。そこで帆村は、爬虫館の鴨田研究員が十一時三十五分前後に、調餌室の前へトラックが到着して動物の餌を搬びこんでいるらしい騒ぎを聴いたということを書いて出した。すると犯行は、この前か後か。——帆村は調餌室の内部にも多分の疑問符号ふしごうが秘められていることも考えないわけにはゆかなかつた。

西郷理学士と一緒に調餌室に入ってみると、帆村は思わず「呀あッ」と叫びたいくらいだった。塀の外で調餌室を想像しているのと、こつやつて大きな俎そじょう上に、血のタラタラにじ滲みでばにくような馬肉

かたまりの塊を見るのとは、まるつきり調餌室というものの実感が違う。壁には、象を料理するのじやないかと思うほどの大鋏やおおのこぎりや大鋸、さては小さい青竜刀ほどもある肉切庖丁などが、燦爛たる光輝を放って掛っていた。倉庫には豎半分に立ち割った馬の裸身や、ダラリと長い耳を下げた兎の籠などが目についた。

この物凄い光景を見た瞬間、帆村の頭脳の中に電光のように閃いた幻影があった。それは、園長の死体が調餌室に搬ばれたと見る間に、料理人が壁から大きな肉切庖丁を下して、サツと死体を截断する。そして駭くべき熟練をもって、胸の肉、臀部の肉、脚の肉、腕の肉と切り分け、運搬車に載せると、ライオンだの虎

だの檻の前へ直行して、園長の肉を投げ込んでやる。……いや、恐おそろしいことである。

「これが、調餌室の主任、北外きたとせいきち星吉氏です」西郷副園長が、ゴム毬まりのように肥こえた男を紹介した。

「やあ、帆村さんですか」北外畜養員はニコヤカに笑った。

「貴方あなたのお名前は兼かねてよく知っていましたよ。今度の事件はまるで、貴方に挑戦しているようなもので、実にうってつけの大事件ですなア」

帆村はこの機嫌のいい、しかし何だかひやかされていような気がしないでもない北外の挨拶に対して、頓とみに言うべき言葉もなかった。しかし此このまんまるく太った子供の相撲取すもうとりのような男

の顔を見ていると、彼が悪事を企図たくらむような種類の人間だとは思えなくなつた。帆村は勢い率直な質問をこの男に向つてする勇気を得たのだつた。

「北外さん、私は園長の身体が、この調餌室ちようじしつか、それとも隣りの爬虫館かで、料理されちまつたように思うのですがね」

「はアはア」北外は小さい口を勢せい一杯いっぱいに開けて、わざとらしくおどろ駭いた。「いやそれは大発見ですな」

「貴方は園長が失踪された朝の、十一時二十分頃から正午ひるまで何処に居られましたか」

「僕が有力なる容疑者というお見立ですな」北外はニヤリと笑つた。「さてお尋ねたずの時間おひに於ては、この室内に僕一人が残つてい

た——とこう申上げると、貴方は喜ばれるのでしようが、実はその時間フルに、一族郎党ここに控えていたんです。それというのが、十一時四十分頃に、けだものの弁当の材料が届くことになつていまして、室からズラかることが出来ないのです」

「それでは其の時間前後は、何をしておいででした？」

「先ず時間前は、当日も六人の畜養員が、庖丁を研いだり、

籠を明けたり、これでなかなか忙しく立ち働きました。そのうちにいつもの時間になると、トラックに満載された材料がドツと搬ばれて来ます。するともう戦場のような騒ぎで、この寒さに襯衣一枚でもって全身水を浴たように、汗をかきます。それが済むと早速調理です。煮るものは大してありませんが、それぞれのけ

だものに頃合いの大きさに切ったり、分けて容器いれものに入れたりするのが大変です。肉類の方は、生きている兎うさぎだの鶏にわとりだのには、冥途いじどゆきの赤札あかふだをぶら下げるだけです、その外ほかのは必ず頭のあ
る魚を揃えたり馬肉の目方をはかつて適當の大きさに截断し、中
には必ず骨つきでないといけないものもあつて、それを拵こしらえるや
ら、なかなか忙しくて、おひるの弁当が、キチンと正午ひるにいただ
けることは殆んど稀まれで、いつも一時近くですね。その忙しさの間
に、園長を拵つかまえてきて、これも料理シペシアルの御馳走として
象ぞうや河馬かばなどにやらなきやならんそうで、いやはや大変な騒さわぎで
すよ」

帆村は、うっかり園丁に象や河馬に人間を食わせる話をしたの

が、こんなところへヒョククリ出て来ようとは思いがけなかつたので、横を向いて苦笑にがわらいをした。兎も角とかく、調餌室の連中はあの時間、犯行を遂とげるなどは非常に困難であることが判った。

してみると、園長の万年筆や釦ボタンは、一体何を語っているのだろうか。理窟からゆけば、どうしても調餌室の連中が疑われてくるのであるが、北外きたとの話では疑うのが無理である。すると、残るのは何者かが調餌室の人たちに嫌疑を向けるために、万年筆を落とし、釦を調餌室の前に捨てたとしかかんがえられない。何者がやったことかは知らぬが、そうだとすると、犯人は実に容易ならぬ周到な計画を持っていたものと思われる。

そこで帆村は大事にしていた切札を、ポイと投げ出す気になっ

た。

「北外きたとさん。隣りの爬虫館はちゆうかんの蟒うわばみどものことですがね。皆で九頭ほどいますが、あれに人間の身体を九個のバラバラの肉塊にくかいにし、蟒どもに振舞ってやったら、嘸さぞよろこんで吞むことでしょうな」
帆村は北外の答えを汗ばむような緊張の裡うちに待った。

「うわツはツはツ」北外は無遠慮ぶえんりよに笑い出した。「いや、ごめんなさい、帆村さん、あの蟒という動物はですな、生きているものなら躍りかかって、たとい自分の口が裂けようと吞のみこみますが、死んでいるものはどんなうまそうなものでも見向きみむもしないという美食家びしよくかです。ここでは主に生きた鶏や山羊やぎを食わせています。貴方は多分園長の死体のことを云っていられるのでしよう

が、バラバラでは隣の先生、相手にしませんでしょうよ」

帆村は折角せつかく登りつめた断崖から、突っ離されたように思った。穴があれば入りたいとは、この場のことだろう。彼は北外畜養員に挨拶をして、遁にげるように室を出た。

彼は人に姿を見られるのも厭いとうように、スタスタと足早に立ち去った。園内の反対の側に遺のこされたる藤堂家の墓所ぼしよがあつた。そこは鬱うっ蒼そうたる森林に囲まれ、厚い苔こけのむした真しんに静かな場所だつた。彼はそこまで行くと、園内の賑にぎかさを背後あとにして、塗ぬりつぶしたような常じょう緑りよく樹じゆの繁みに対して腰を下した。

「ああ、何もかも無くなつた！」

帆村は一本の煙草をつまむと、火を点けて歎たん息そくした。

「一体、何が残っているだろう」

最初から一つ一つ思いかえしてゆく裡うちに、特に気のついたことが二つあった。一つは園長がいつも呑み仲間としてブラリと訪ねて行った古き戦友半崎はんざきこうへい甲平こうへいに会うことだった。そうすれば、まだ知られていない園長の半面生活はんめんせいかつが曝露ばくろするかも知れない。もう一つはどうしても事件に関係があるらしい爬虫館を、徹底的に搜索しなおすことだった。ことに開けると爬虫たちの生命おびやかを脅すことになるという話のあった鴨田研究員苦心の三本のタンクみないなものも、此際このさいどうしても開けてみなければ済すまされなかつた。あのタンクは、故意か偶然か、人間一匹を隠すには充分な大きさをしているのだった。

そんな結論を生んでゆく裡に、帆村の全身にはだんだんに反抗的な元気が湧き上つてきたのだった。

「須永すながを呼ぼう」

彼は公衆電話に入って帆村探偵局の須永助手を呼び出すと直すぐに動物園へ来るように命じた。

5

爬虫館の鴨田研究室の裡うちへツカツカと入って行った帆村探偵は、

そこに鴨田氏が背後向きになり、ビーカーに入った茶褐色の液体をパチャパチャ掻き廻しているのを発見した。外には誰も居なかった。

帆村の登音あしおとに気がついたらしく、鴨田は静かにビーカーを振る手をちよつと停めたが、別に背後を振り返りもせず、横に身体を動かすと、硬質陶器こうしつとうきでこしらえた立派な流し場へ、サツと液体を滾こぼした。すると真白な烟けむりが濛々もうもうと立昇たちのぼった。どうやら強酸きょうさんせい性の劇薬らしい。なにをやっているのだろう。

「鴨田さん、またお邪魔に伺いました」帆村はぶつきら棒に云つた。

「やあ！」と鴨田は愛想よく首だけ帆村の方へ向いて「まだお話

があるのですか」とニヤニヤ笑い乍ら^{なが}、水道の水でビーカーの底を洗った。

「先刻の御返事をしに参りました」
さつき

「先刻の返事とは？」

「そうです」と帆村は三つの大きな細長いタンクを指して云った。

「このタンクを直ぐに開いていたいただきたいのです」

「そりや君」と鴨田はキツとした顔になって応えた。「さつきも言つたとおり、これを直ぐ開けたんでは、動物が皆斃死^{へいし}してしまいます」

「しかし人間の生命には代えることは出来ません」

「なに人間の生命？　はッはッ、君は此のタンクの中に、三日前

に行方不明になった園長が隠されているのだと思つて居るのですね」

「そうです。園長はそのタンクの中に入つて居るのです！」

帆村はグンと癪にさわつた揚句あげく（それは彼の悪い癖だつた）大変なことを口走つてしまつた。それは前から多少疑いを掛けていたものの、まだ断定すべきほどの充分な条件が集つていなかつたのだ。怒鳴どなつたあとで大いに後悔こうかいはしたものの、不思議に怒鳴つたあとの清々すがすがしさはなかつた。

「君は僕を侮辱ぶじよくするのですね」

「そんなことは今考えていません。それよりも一分間でも早く、このタンクを開いていただきたいのです」

「よろしい、開けましょう」断乎として鴨田が思切ったことを云った。「しかし若しもこのタンクの中に園長が入っていないかつたら君は僕に何を償います」

「御意のままに何なりと、トシ子さんとあなたの結婚式に一世一代の余興でもやりますよ」

この帆村の言葉はどうやら鴨田理学士の金的を射ちぬいたようであった。

「よろしい」彼は満更でない面持で頷いた。「ではこの装置を開けましょうが、爬虫どもを別の建物へ移さねばならぬので、その準備に今から五六時間はかかります。それは承知して下さい」

「ではなるべく急いで下さい。今は、ほう、もう四時ですね。す

ると十時ごろまでかかりますね。警官と私の助手を呼びますから、悪あしからず」

「どうぞご随意ずいに」鴨田は云った。「僕も今夜は帰りません」

帆村はその部屋から警官を呼んだ。副園長の西郷にも了解りようかいを求めたが、彼も今夜はタンクが開くまで、爬虫館に停つていよう云った。

しかし帆村は、彼等と別なコースをとる決心をしていた。丁度そこへ助手の須永がやってきたので、万事こまごまについて、細々と注意を与え、爬虫館の見張りを命じてから、彼一人、動物園の石門を出ていった。既に秋の陽ひは丘の彼方に落ち、真黒な大杉林の間からは暮れのこった湖面こめんが、切れ切れに灰白ほのしろく光っていた。そ

して帆村探偵の姿も、やがて忍び闇しのやみの中に紛れこんでしまった。それから時計のセコンドの響きばかりがあつた。午後五時、六時、七時、それから八時がうつても九時がうつても、帆村の姿は爬虫館へ歸つてこなかつた。九時半を過ぎると多勢の畜養員や園丁が檻かっを担いで入つて来て無造作むぞうさにニシキヘビを一頭入れては別の暖室だんしつの方へ搬んで行つた。仕事は間もなく終つた。助手の須永は、先ほどから勝誇つたように元気になつてくる鴨田理学士の身体を、片隅かたすみから睨にらみつけていた。やがて爬虫館の柱時計がボーン、ボーンと、あたりの壁を揺すぶるように午後十時を打ちはじめた。人々は、首をあげてじつと時計の文字盤を眺め、さて入口をふりかえつたが、どうやら求める蹻音あしおとは蟻の走る音ほども

聞えなかつた。

「帆村さんはもう帰って来ないかも知れませんよ」

鴨田理学士が両手を揉み揉み云つた。

「いつまで待つて居たつて仕様がありませんから、この儘閉めて帰ろうではありませんか」

警官と西郷副園長とが、腰を伸して立ち上つた。須永も立ち上つた。しかし彼は鴨田の解散説に賛成して立つたわけではなかつた。

「もう少し待つて下さい。先生は必ず帰つて来られます」

須永は叫んだ。

「いや、帰りません」

鴨田は尚も云った。

「それでは——」と須永は決心をして云った。「先生の代りに僕が拝見しますから、このタンクを開けて下さい」

「それはこつちでお断りします」

憎々しい鴨田の声に、須永が尚も懸命に争っている裡に、いつの間にか開いたか、入口の扉が開かれ、そこには此の場の光景を微笑ましげに眺めている帆村の姿があつた。

「皆さん大変お待たせをしました」と挨拶をした後で、「おや隣どもは皆、退場いたしましたね、では今度は私が退場するか、それとも鴨田さんが退場なさるか、どつちかの番になりました。ではどうか、あれを開いていただきましょう、鴨田さん」

「……」鴨田は黙々^{もくもく}として第一のタンクの傍へ寄り、スパナーで六角の締め金の一つ一つガタンガタンと外^{はず}していった。一同は鴨田の背後から首をさし伸べて、さて何が現れることかと、唾を呑みこんだ。

「ガチャリ！」

と音がして、タンクの上半部がパクンと口を開いた。が、内部は同心管^{どうしんかん}のようになっていて、鱧^{ふか}の鰭^{ひれ}のような大きな襞^{ひだ}のついた其の同心管の内側が、白っぽく見えるだけで、中には何も入っていないかった。

「空虚^{から}っぽだッ」

誰かが叫んだ。

鴨田研究員は第二のタンクの前へ、黙々として歩を移した。同じような操作がくりかえされたが、これも開かれた内部は、第一のタンクと同じく、空虚からだった。

失望したような、そして又安心したような溜息が、どこからともなく起った。

遂に第三のタンクの番だった。流石さすがの鴨田も、心なしか緊張に震える手をもって、スパナーを引いていった。

「ガチャリ！」

とうとう最後の唐櫃からびつが開かれたのだった。

「呀あッ！」

「これも空虚っぱだッ！」

帆村は須永に目くばせをして彼一人、前に出た。彼の手には自動車らっばの喇叭らっばの握りほどあるスポイトとビーカーとが握られていた。彼は念入りに、白い襞ひだのまわりを獵あさつて、何やら黄色い液体をスポイトで吸いとり、ビーカーへ移していた。

だがそれは大した量でなく、ほんの底を潤うるおす程度にとどまつた。

帆村なおは尚もスポイトの先で、弾力のある襞ひだを一枚一枚かきわけ、検しらべていたが、

「呀ッ」

と叫んで顔を寄せた。

「これだッ。とうとう見付かった」

そう云つて素早く指先でつまみあげたのは長さ一寸あまりの、
 柳箸やなぎばしほどの太さの、鈍く光る金属——どうやら小銃しょうじゅうの弾たま
 丸まのような形のものであった。

一同は怪訝けげんな面持で、帆村が指先にあるものを眺ながめた。帆村は
 その弾丸のようなものを鴨田の鼻先へ持つていった。

「貴方あなたはこれをご存知ですか」

鴨田は腑ふに落ちかねる顔付で、無言に首を振った。

「貴方はご存知なかったのですね」

帆村はどうしたのか、ひどく歎たん息そくして云った。

「これはですね——」

一同は帆村の唇を見つめた。

「——これは露兵ろへいの射つた小銃しょうじゅう弾だんです。そして、これは三十日から行方不明になられた河内園長の体内に二十八年この方、潜もぐっていたものです。云わば河内園長の認識標にんしきひょうなんです。しかも園長の身体を焼くとか、溶かすかしなければ出て来ない終しゆう身しんの認識標にんしきひょうなんです」

「そんな出鱈目でたらめは、よせ！」

鴨田まづさおが蒼白まっさおにブルブルと慄えながら呶鳴うなづつた。

「いや、お気の毒に鴨田さんの計画は、とんだところで失敗しましたよ。貴方あなたは園長を殺すために、医学おさを修め、理学を学び、スマトラまで行って蟒へびの研究に従事じゆうじせられた。そして日本へ帰られると、多額の寄附をしてこの爬虫館を建て、貴方は研究を続け

られた。七頭のニシキヘビは貴方の研究材料であると共に、貴重な兇器きようきを生むものだった。私もよく医学教室で、犬を手術し、唾液腺だえきせんを体外へ引張り出して置いて、これにうまそうな餌を見せることにより、体外の容器へ湧きだした犬の唾液を採集する実験を見かけますが、貴方は生物学と外科とにすぐれた頭脳と腕うでとで、蟒うわばみの腹腔ふくこうに穴をあけ、その消化器官の液えきじゆう汁じゆうを、丹念に採集したのです。それは周到なる注意で今日まで貯蔵されてきました。そして又ここに並んでいるタンクは、巧妙な構造をもった人造胃腸だったんです」

あまりに意外な帆村の言葉に、一同は唾然あぜんとして彼の唇を見守るばかりだった。

「鴨田さんは三十日の午前十一時二十分頃、園長をひそかに人氣ひとけのない此の室に誘い、毒物で殺したんです。そこで直ちに園長の軽装けいそうを剥はいで裸体とし、着衣などは、あのおおかばん大鞆おほかばんに入れ其その夕方、何喰わぬ顔で園外はこに搬はこび去りましたが、それは後の話のちとして、鴨田さんは園長の口をこじ開けるや、蟒の消化液では溶けない金歯をすつかり外はずして別にすると、もうこれで全部が溶けるものと安心して此の第三タンクに入れました。そこで永年貯蔵して置いたニシキヘビ消化液をタンクへ入れて密封をすると、電動仕掛けで同心管——それは襞ひだをもった人造胃腸なんです、その胃腸を動かし始めたんです。適当な温度に保ってこれを続けたものですから、鴨田さんの研究によると、今夜の八時頃までに完全に

園長の身体はタンクの中で、影も形もなく融解してしまふことが判っていました。

鴨田さんにその自信があつたればこそ、この時間になつてタンクを開くことを承知されたのです。そして尚なおも計画をすすめて、タンクの中の溶液を、そのまま下水へ流してしまふことにしました。急いで流せば、こんな静かなところだからそれと音を悟さとられるので、排水弁はいすいべんを半開はんびらきとし、ソロソロと園長の溶けこんだタンクの内容液を流し出したんです。しかしそれは一つの大失敗を残しました。流出速度が極めて緩慢かんまんだったために、園長の体内に潜入していた弾丸たまは流れ去るに至らず、そのまま襞ひだの間に残ざ留りゆうしてしまつたんです。この弾丸というのは、園長が沙河さかの

「だいかいせん大会戦でふんせん奮戦の果に身に数発の敵弾をうけ、のち後に野戦病院で
大手術をうけましたが、遂に抜き出すことの出来なかつた一いちだん弾
が身体の中に残りました。その一弾が皮肉にもひにく棺桶かんおけならぬ此の
タンクの中へ残ったわけなんです。本当に恐ろしいことです。
なお付け加えると、園長のきんば金歯は、だいたん大胆にも私の見ている前で
ビーカー中のおうすい王水に溶かし下水道へ流しました。万年筆やボタン鉦は
鴨田さん自身がま撒いたもので、これは犯罪者特有のちよつとした
そうらんしゅだん搔乱手段です」

でたらめ「出鱈目だ、ねつぞう捏造だ！」

鴨田は尚もほうこう咆哮した。

「ではや己むを得ませんから、最後のお話をいたしましょう」帆村

は物静かな調子で云つた。「この犯行の動機は、まことに悲惨な
 事実から出て居ます。話は遠く日露戦争の昔にさかのぼりますが、
 河内園長が満州の野に出征して軍曹となり、一分隊の兵を
 率いて例の沙河の前線、遼陽の戦いに奮戦したときのこ
 とです。其のとき柵山南条という二等兵がどうした事か敵前
 というのに、目に余るほど遺憾な振舞をしたために、皇軍の
 一角が崩れようとするので已むを得ず、涙をふるつて其の柵山二
 等兵を斬殺したのです。これは、軍規に定めがある致方の
 ない殺人ですが、それを見ていた分隊中の或る者が、本国へ凱
 旋後柵山二等兵の未亡人にうっかり喋つたのです。未亡人は殺
 された夫に勝るしつかり者で、そのときまだ幼かった一人の男の

子を抱きあげて、河内軍曹への復讐ふくしゅうを誓ったのです。その男の子——兎三夫君とみおは爾来じらい、母方の姓せい鴨田を名乗って、途中で亡くなった母の意志を継つぎ、さてこんなことになったのです」

帆村は語を切った。しかし鴨田学士は、今度は何も云わずに項う低なだれていた。

「もう後は云う必要がありますまい。最後に御紹介したい一人の人物があります。それはこの話のヒントを与えて以後私の調べに貢献こうけんして下さった故園長の古い戦友、半崎甲平老人であります。この老人は同郷どうきょうの出身ですが、衛生隊員として出征せられていたので、後に園長がX線で体内の弾丸たまを見たときにも立合ない、また戦場の秘話を園長から聴きもした方です。鴨田さんの亡なき父

君のことも知ってられるんですから、此処へお連れしました。いま御案内して参りましょう」

そういつて帆村は立上ると、入口の扉をあけた、が、其処には老人の姿は見えなかった。向うを見ると、爬虫館の出入口が人の身体が通れるほどの広さにあき、その外に真黒な暗闇があつた。

「呀ッ、鴨田さんが自殺しているッ」

そういう声を背後に聞いた帆村は、もう別にその方へ振返ろうともしなかった。

そして彼の胸中には、事件を解決するたびに経験するあの苦が酸っぱい悒鬱が、また例の調子で押し騰つてくるのであつた。

青空文庫情報

底本：「海野十三全集 第2巻 俘囚」三一書房

1991（平成3）年2月28日第1版第1刷発行

初出：「新青年」

1932（昭和7）年10月号

入力：tatsuki

校正：花田泰治郎

2005年5月26日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.aozora.gr.jp/) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランテイアの皆さんです。

爬虫館事件

海野十三

2020年 7月12日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>